

二 季節を表す言葉

第2部 / すぐに役立つ多様な表現集

季節感を表す言葉

春

春一番「はるいちばん」

季節が春に変わる頃に吹く、立春後の最初の強い南風。

東風「こち」

冬の季節風がやみ、東寄りの方から吹いてくる風。

斑雪「はだれゆき」

うつつらと降った雪。また、まだらに消え残った雪。気温が上がリ、冬期間に積もった雪が解けて斑まだらになってきた状態をいう。

雪形「ゆきがた」

春、高い山の雪解けが始まり、山肌やまはだに雪が残った形を馬・鳥・人などに見立てたもの。かつては雪形の出現

を、農作業進行の目安にしたり、農作物の出来を占ったりした。

山笑う「やまわらう」

春の山が明るくおっとり見える様子。

桃の節句「もものせつく」／雛祭り

「ひなまつり」

三月三日。主に女兒の健やかな成長を願う祭り。雛壇に雛人形を飾り、桃の花を供え、菱餅や白酒で祝う。

白酒「しろざけ」

もち米・味醂などを材料として作った濃厚な白色の酒。甘味が強く、独特の香気がある。雛祭りに供える。

社日「しゃじつ／しゃにち」

春分・秋分の日に最も近い戌ちのえの日。春は豊作を祈り、秋は収穫に感謝する。

日永「ひなが」

春分を過ぎ、昼間が長くなること。

野焼き「のやき」

早春、新しい草がよく生えるように、野の枯れ草を焼き払うこと。虫の駆除になり、灰は肥料になる。

猫の恋「ねこのこい」

春に猫が発情して鳴きたてること。

陽炎「かげろう」

大気に温度差が生じることにより光が不規則に屈折し、風景が揺らいだように見える現象。

うららか／長閑「のどか」

空が晴れ、太陽が照り輝く、よい陽気でのんびりした様子。

東大寺お水取り

奈良の東大寺で三月一日～十四日まで二月堂で行われる法会の中の行事。十二日夕刻より籠松明十二本を回廊で振り回す「お松明」を行い、午前二時ごろ若狭井から汲んだ香水を本堂の仏前に供える「お水取り」

をする。

臍「おぼろ」

春の夜がぼうっとかすんで見える現象。春に多い湿った南風の影響で水蒸気がたちこめるため。昼の場合は霞かすみとよぶ。

花祭り「はなまつり」／灌仏会「かんぶつえ」

四月八日。釈迦の生誕を祝う行事。

花御堂はなみだうの中に水盤を置き、そこに安置した誕生仏に甘茶を注いで拝む。

誕生仏とは、生後すぐに歩き出し右手で天を指し左手で地を指して「天上天下唯我独尊」と唱えたといわれる釈迦の姿をかたどったもの。甘茶

を注ぐのは、この誕生時に八大魔王が現れ、甘露の雨を降らせて湯浴みさせたという故事による。

つちふる／黄砂

モンゴルなど大陸の砂漠の砂塵が風に巻き上げられて空を覆い、日本まで運ばれ、降ってくるもの。

壬生狂言「みぶきようげん」

四月二十一日から二十九日にかけて

京都市の壬生寺で大念仏法要を営む間、毎日演じられる狂言。念仏の理念を一般大衆に説くため、狂言の身ぶりを用いたものという。

潮干狩り「しおひがり」／磯遊び「いそあそび」

引き潮の浜で貝や魚などを獲ること。陰暦三月三日から七日頃の大潮十日頃の長潮と、春は一年で最も潮の干満が大きく、浜は遠くまで干上

がるため、干潟遊びが楽しめる。

菜種梅雨「なたねづゆ」

「菜種」はアブラナ。それが咲く三月中旬から四月にかけての長雨。

花曇「はなぐもり」

桜が咲く頃の曇り空。桜の花を養う曇天、の意味で養花天ともいう。

桜前線「さくらぜんせん」

ソメイヨシノの開花日を同じくする地点を結んだ線。

紫雲英田「げんげだ」

「紫雲英」はレンゲソウ。それを肥料や家畜の飼料用に栽培する畑。

蛙の目借り時「かわずのめかりとき」

蛙の目借り時「かわずのめかりとき」

カエルが盛んに鳴く頃の、眠気を催す春暖の時期。

八十八夜「はちじゅうはちや」

立春から数えて八十八日目にあたる日。五月二日または三日。「八十八夜の別れ霜」といい、農事に適した時期となるため、農繁期に入る。茶摘みの最盛期にもあたる。

端午の節句「たんごのせつく」／鯉幟

「こいのぼり」／菖蒲湯「しょうぶゆ」

「端午の節句」はもともと物忌みや悪霊払いを行う日だった。後に、この時期に咲く菖蒲が「尚武（武道を重んじる）」に通じるため、男児

の出世や武運長久を祈る節句となった。男児のいる家では柏餅や粽を用意し、武者人形を飾り、鯉幟をあげる。菖蒲湯に入る習慣もある。

子安貝「こやすがいが」

殻は卵形で光沢があつて厚く堅い。古くから安産のお守りとされた。